



Title	環北太平洋地域言語学の可能性に向けて : 現状と課題
Author(s)	堀, 博文
Description	特別企画 : 追悼 宮岡伯人先生
Citation	北方言語研究, 16, 1-6
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99326
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99326
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_Hori.pdf



【特別企画：追悼 宮岡伯人先生】

環北太平洋地域言語学の可能性に向けて
—現状と課題—

堀 博文
(静岡大学)

キーワード：環北太平洋地域、北アメリカ北西部、北東アジア

1. はじめに

北方諸言語の研究を牽引してこられた宮岡伯人先生（1936～2023 年）は、アラスカ・ユピック語研究の第一人者として、日本国内はいうに及ばず、海外においても著聞している。特に、長年のご研究の成果をまとめられた Miyaoka (2012) は、アラスカ・ユピック語の全貌の仔細を記述した、まさに *magnum opus* であり、言語記述のあるべき範を示したものである。

一方で、宮岡先生が常に関心を寄せられていたのは、環北太平洋地域の諸言語とその研究であった（次節参照）。その地域に分布する諸言語に関する深い理解と広い知識をお持ちであったその一端は、例えば、亀井・河野・千野（編著）（1988～1993）、河野・千野・西田（編著）（2001）に収められた、その地域の言語の文法や文字に関する要を得た概説に見ることができる¹。更に、この地域の言語を俯瞰し、それらの言語の研究の背景にある様々な問題を直接的に扱っておられるものとして宮岡（1992a）、Miyaoka (1994)、宮岡（2009）がある。いずれも、環北太平洋地域という枠組を設定することの歴史的な背景や意義、更に、その問題点が扱われており、宮岡先生が、この地域に関心を寄せ、その研究の発展を冀っていたことが十分に窺われる。環北太平洋地域の言語研究の進展は、この地域を対象とする研究者の集団である本学会の目標の一つでもある。今ここにおいて一旦、環北太平洋地域の言語学に向けた現状と課題を整理し、以て宮岡先生を追悼するよすがの一つとすべく、このような特集を企画した次第である。

以下、本稿では、宮岡先生のそれらのご論考をもとに、環北太平洋地域という枠組とその問題点を振り返るとともに、最近の研究動向の大きな成果の一つとしていわゆる「デネ・イエニセイ説」を取り上げる。

2. 環北太平洋地域の諸言語

「環北太平洋」というのは、旧大陸側では日本列島を、新大陸側ではカリフォルニアを南限とする、北東アジアと北アメリカ北西部に渡る地域を指す。それは、渡辺（1988, 1992）が「北太平洋沿岸狩猟採集民文化圏」と称する地域と一致し、生態的には、定住を基本とする、漁撈ないし水産物依存型の生活基盤をもつなど、他の地域の狩猟採集民と区別される特

¹ なかでも宮岡（1992c）は、いまだに北アメリカ先住民の諸言語の全体の俯瞰を得るための必読の文献である。

異性を共有する。

言語の面をみると、北東アジアでは、日本語、朝鮮語、アイヌ語、ニブフ語、ユカギール語、更に、チュクチ・カムチャツカ語族、エスキモー・アリュート語族を架橋として北アメリカにわたり、文化領域でいうところの北西海岸、カリフォルニア、台地、亜極北と極北（西端部）を含む北西部の諸言語が含まれる。いずれも系統不明の孤立言語であるか、たとえ語族をなしていても、所属する言語の数が少ない小語族である。環北太平洋は、そのような言語が多く分布する「世界でもきわめて特異な地域」（宮岡 1992a: 5）である。

その特異性がよりはっきりと現われているのは、北アメリカ北西部である。北アメリカ先住民諸言語の系統分類に関する諸説の中でも宮岡（1992c）で示されている分類によれば、メキシコ以北の北アメリカに認められる 58 の語族と孤立言語のうち、その約 6 割に当たる 35 の語族と孤立言語がこの北西部に分布する。このように狭い地域に小集団の言語が犇めき合う様は、まさに「蝸集」（宮岡 1992a: 5）そのものであり、それは、分布のなだらかな東側と比べて著しく対照的である。更に、環北太平洋地域全体を見渡してみると、ある程度の分布の濃淡はあるにせよ、「言語蝸集のベルト」（同：49）をなすと見做すことができ、その点において、環北太平洋地域が言語的にも一つの枠組、更にいえば、言語領域と捉える可能性が示唆される。特に、琉球の諸言語以外に同系の言語を持たない日本語を環北太平洋地域に据えてみると、この孤立的に存在する様は「普遍的とさえいえる」（宮岡 1992b: 381）ものであり、そうであるとするならば、この環北太平洋地域という枠組は日本語の系統あるいは形成を考える上でも重要性を帯びてくるといえる（後述も参照）。

3. 環北太平洋地域の諸言語の歴史的背景

言うまでもなく、環北太平洋地域の諸言語には、ヨーロッパ系の人々と接触する以前は、文字によって書き表わされる習慣がなかったのも、文献によってそれらの古態を直に探るという術はない。また、いくつかの言語とともに語族をなしている場合であっても、それぞれの語族に属する言語の数が少なく、分岐の度合いも比較的浅いために、数千年かそれ以上の姿を再構するにも限界がある。加えて、上に述べたように、系統が不明な孤立言語が多く存在していることも、この地域の先史を言語の面から解明することを一層困難にしている。

そうした言語面での制約の一方で、それぞれの言語を話す集団は、いずれも規模が小さく、それゆえに人口密度も低かったという生態的な要因もこの地域の言語史の解明を難しくしている。すなわち、この地域の諸言語が一つの連続体をなすといっても、その中の小集団が何らかの要因によって一切の痕跡を残さずに消滅してしまえば、その連続体が途切れることになる。我々の知り得ない過去において、そのような事態が繰り返し生じたことは想像に難くないが、特にそれが現存する孤立言語と同系であったとされる言語であれば、歴史的背景の全体を得るのは一層容易ではないことが了解される。環北太平洋地域を「言語蝸集のベルト」としてみたとき、北アメリカ北西部に比べ、言語の密集度が低い旧大陸側においては、語域の広い大きな語族や諸言語が、かつては一層色濃く認められた「蝸集」の度合いを弱めてしまった可能性が考えられるであろう（参考：宮岡 1992b）。

一方で、その「言語蝸集」の度合いが類を見ないほどに著しい北アメリカ北西部は、如何なる要因が作用してそのような状態が保たれたのかという疑問もある。勿論、北西部におい

でも、上で述べたような言語や語族の消失が繰り返しあったことは否定できないが、しかし、それぞれの社会集団が小規模ながら、「平衡のとれた棲みわけと共存」（宮岡 1992a: 14）をしていたことがこの稀な言語蝟集の維持に与ったことは想像に難くない。更に、この地域では、他の集団との交易や結婚、奴隷制度を通じて、二言語かそれ以上の言語を併用していた社会が普通であった。その結果、いくつかの特徴が拡散して生じた言語間の類似が影響関係に起因するのか、それとも系統関係に由来するのかを見極めるのを難しくしているという、新たな問題を呈している。

この北アメリカ北西部の「言語蝟集」は、いわば言語の「吹き溜り」（宮岡 1992a: 50）でもある。すなわち、その言語の分布状態は、相対的に言語の分布の古い様相を反映するものであり、更にいえば、言語の面からみて、北アメリカの諸言語が分散する以前の中心がその地域にあったという見方に繋がる。それは、宮岡（1992a: 51）によれば、北西部を含んだ広い語域に渡るような語族（例：アルギック語族）では、言語の分岐の度合いが東よりも西に著しいという事実をもとに、その故地が内陸よりも沿岸部に推定されることから窺われる。更に、この「言語蝟集」は、北米先住民の祖先集団がベーリング陸橋を渡って、太平洋沿岸を伝うように移動したという説との関連も示唆するものである（宮岡 2009 も参照）。

環北太平洋地域のアジア側をみると、北東アジアの周辺には、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族、アルタイ諸言語などが広い地域に渡って分布している。それは、これらの言語が経済的、政治的優位性ととも、多種多様な小集団の言語を完全に吸収したり、類型的に均したりしたその結果と見て取れる。その意味では、この状況が「新世界」であり、北東アジアから新大陸にかけて、つまり、環北太平洋地域こそが「旧世界」である（Miyooka 1994: 3, 宮岡 2009: 36）。宮岡（1992b: 382）は、日本語は、まさにその二つの世界の接点にあることを指摘し、その来由については「言語的旧世界の諸言語と関連または共通する部分（問題）がありうる」（宮岡 2009: 36）としている。上に述べたように、日本語を環北太平洋地域という枠組に置くことの意義がここにもあるといえよう。

4. 環北太平洋地域言語学に向けて

環北太平洋地域に分布する言語の歴史的な背景を明らかにするのは、3 の冒頭で述べたように、多くの困難を伴う性質のものである以上、すぐに明確な答えが出せるわけではない。宮岡（1992a: 6）は、「類型的ならびに系統的多様性の背景に探りをいれていくことは、今後の大きな課題である」とし、その言語状況そのものを概観すること、更に、他と比べることを通じて、それぞれの言語の性格や類似をしっかりと捉えるような試みが必要であると説く。加えて、分けてもこの地域にみられる「言語蝟集」は、言語接触、言語混淆、多言語使用、それらに起因する様々な言語要素の伝播など、一般的な問題の解明にも繋がるような材料を提供する可能性があることを指摘する（宮岡 1992a: 49）。しかし、近年では、必ずしも環北太平洋地域ではないが、そうした方面に関する知見が蓄積されつつあるのも事実である。この地域の特異性に留意しつつ、他地域で得られた成果を参考にしながら、この地域が呈する様々な問題の解明に向かっていくことも必要であろう。

「言語蝟集」の度合いの著しい北アメリカ北西部は、上にも述べたように、かつての言語の分布の姿を留めているとするのであれば、旧大陸から新大陸へと人類がどのようなルー

トを辿ってきたのかという問題と自ずと結びつく。勿論、それが言語学で推定しうる年代よりもはるか以前のことであることを考えれば、その問題に言語学が貢献しうる可能性は低いと言わざるを得ないが、しかし、このような言語の「吹き溜り」が生じたのはなぜかというのは、この地域の言語史を明らかにする上で考究すべき問いの一つであるに違いない。

一方、アジアにおいては、これも先ほど述べたとおり、日本語が「言語蝸集のベルト」の一端に入り、かつ、それが言語的「旧世界」と「新世界」の接点に位置づけられるとするならば、北アメリカ北西部の言語史の解明にあたって課題としたことは、日本語の来由にも関係してくると思われる。

新旧両大陸の言語の系統問題に関わる近年の大きな進展の一つとして、ヴァイダ (Edward Vajda) が唱える「デネ・イエニセイ説」をあげなくてはならない。これは、北アメリカのアラスカなどで話されるナ・デネ大語族 (=アサバスカ語族+イーヤック語+トリングット語) とシベリアのイエニセイ語族 (現存するのはケット語のみ) が同系であると主張する説であり、その出発点となる根拠は、それらの言語が動詞形態法の特異性を共有する点にある。宮岡 (2009) は、この説を「かたち」(参考: 宮岡 2002, 2015, Miyaoka 2007) に関わるゆえに説得力があると評価し、その証明に大いなる期待を寄せている。この説は、それらの言語に共通してみられる、類型的な特異性に着目したところから始まったが、近年では、音対応も含め、動詞形態法の細部に至る対応を見出すにとどまらず、更に、それらの言語の祖語を仮定することによって、それぞれの語族の内部を見るだけでは明らかにし得なかった問題を解明することにも成果をあげつつある (Vajda 2022, 2025)。これまでナ・デネ大語族は、北米大陸以外の様々な言語との系統関係が唱えられてきたものの、そのどれをとっても確たる証拠がなく、推測の域を脱し得ないものばかりであった。それだけにヴァイダのこの説に対する期待は極めて高く、その進展に今後も注目する必要がある。

その「デネ・イエニセイ説」に関連して、フォーテスキュー (Michael Fortescue) は、エスキモー・アリュート語族 (Eskaleut) がウラル語族とユカギール語と系統関係があるとする「ウラル・シベリア説」(Fortescue 2022) を唱えている²。Fortescue (2022) では、これらの言語の間に音対応があるとして、語彙や形態法の再構を試みているが、上の「デネ・イエニセイ説」に比べると、それほど十分な支持を得るには至っていないように思われる。その系統関係の是非はともかくとして、それらの言語の間に何らかの接触があったとするならば、「デネ・イエニセイ説」と併せて、北極を中心とする地域も含む言語領域の構築に向けた、次の展開へと繋がる可能性が蔵されていると言えよう。

宮岡 (1992) 以来、環北太平洋地域の言語の記述が多く現われ、その周辺の言語との関係を扱う研究が増えてきているにも拘わらず、環北太平洋地域の言語がみせる系統的・類型的多様性を解明する試みは、まだその途上にあると言わざるを得ない。そのために必要なのは、何を描いても「言語の具体へのとりくみと扱い」(宮岡 2009: 38) である。この地域の言語の多くが消滅する危機の度合いがますます高まりつつあるという深刻な現実、それと同時に、地域によっては、フィールドに赴くこと自体が様々な事情から阻まれているという現実

² Fortescue (1998) では、それらに加えて、チュクチ・カムチャツカ語族も含まれていたが、後に除外された。

がある。それだけこの地域の言語の記述研究を遂行することそのものが厳しさを増している。こと言語に関する事実の解明は言語学の仕事であり、「言語の具体と格闘」(宮岡 2015: 54) することをおろそかにすべきでないことは勿論であるが、他の分野と連携することによってその成果を傍証としながら、この地域の言語の歴史的背景を解き明かしていくことも積極的に考えるべきであろう。

5. 本特集の構成

本特集は三編から構成される。まず、風間伸次郎『北の言語：類型と歴史』34年後の概観「北東アジア」と堀博文「北アメリカ北西海岸地域の言語接触：北部を中心に」の二編により、主に宮岡(1992)以降の環北太平洋地域の言語研究の動向と今後の課題を論じる。風間論文は宮岡(編)(1992)以降の34年間で北東アジアの諸言語に関するどのような{記述／類型／歴史}研究の論考が積み上げられてきたかを可能な範囲で整理し示そうとするものである。続く堀論文は、北アメリカ北西海岸地域の中でもLeer(1991)の提唱する「北部北西海岸言語領域」に焦点を当て、その言語領域で共通してみられるという言語現象を検討するとともに、その歴史的背景、更に北アメリカ北西海岸地域における位置づけについて論じる。ただ(宮岡先生が強く示された両大陸に跨り両大陸を繋ぐ)「環北太平洋」を視野にした論文が提示できなかったのはひとえに筆者たちの力量不足によるものであり、宮岡先生には申し訳のない思いである。

最後の一編、風間伸次郎「宮岡先生を悼んで」は研究者・教育者、そして一人の人間としての宮岡先生の横顔を幾許ながらも後世に伝えようとするものである。

本特集が、宮岡先生が授けてくださった学恩に対し、わずかでも報いるものとなることを願いつつ、哀悼の誠を捧げたい。

参考文献

- Fortescue, Michael (1998) *Language relations across Bering Strait: Reappraising the archaeological and linguistic evidence*. London: Cassell
- (2022) The Uralo-Siberian hypothesis. In: Michael Fortescue and Edward Vajda. *Mid-Holocene language connections between Asia and North America*: 11–234. Leiden: Brill.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)(1988, 1989, 1992, 1993)『言語学大辞典 第1～5巻 世界言語編』東京：三省堂.
- 河野六郎・千野栄一・西田龍雄(編著)(2001)『言語学大辞典 別巻 世界文字編』東京：三省堂.
- 宮岡伯人(1992a)「環北太平洋の言語」, 宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』: 3–65, 東京：三省堂.
- (1992b)「あとがき」, 宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』: 381–383, 東京：三省堂.
- (1992c)「北米インディアン諸語」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典 第4巻 世界言語編⑦-1』: 1004–1078, 東京：三省堂.

- (2009) 「言語的『旧世界』としての環北太平洋」, 谷本一之・井上紘一 (編) 『「渡鴉のアーチ」(1903–2002) ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(国立民族学博物館調査報告 82): 29–44, 吹田: 国立民族学博物館.
- (2002) 『〈語〉とはなにか エスキモー語から日本語をみる』 東京: 三省堂.
- (2015) 『「語」とはなにか・再考 日本語文法と「文字の陥穽」』 東京: 三省堂.
- Miyaoka, Osahito (1994) Introduction. In: Osahito Miyaoka (ed.), *Languages of the North Pacific Rim*: 1–7. (Hokkaido University Publications in Linguistics No. 7) Sapporo: Department of Linguistics, Faculty of Letters, Hokkaido University.
- (2007) Linguistic diversity in decline: A functional view. In: Osahito Miyaoka, Osamu Sakiyama, and Michael E. Krauss (eds.), *The vanishing languages of the Pacific Rim*: 144–162. Oxford: Oxford University Press.
- (2012) *A grammar of Central Alaskan Yupik: An Eskimoan language*. (Mouton Grammar Library 58) Berlin/New York: De Gruyter Mouton.
- Vajda, Edward (2022) The Proto-Yeniseian hypothesis. In: Michael Fortescue and Edward Vajda. *Mid-Holocene language connections between Asia and North America*: 237–458. Leiden: Brill.
- (2025) New evidence for Dene-Yeniseian. 日本北方言語学会第 8 回大会における特別講演 (2025 年 9 月 26 日, オンライン)
- 渡辺仁 (1988) 「北太平洋沿岸文化圏 狩猟採集民からの視点 I」, 『国立民族学博物館研究報告』 13 (2): 297–356, 吹田: 国立民族学博物館.
- (1992) 「北洋沿岸文化圏: 狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」, 宮岡伯人 (編) 『北の言語: 類型と歴史』: 67–107, 東京: 三省堂.

(ほり・ひろふみ jjhori@shizuoka.ac.jp)